

39 個別支援計画の作成、実施、評価に関するプログラム試行の取り組み

自立支援局 秩父学園 療育支援課 佐山智洋、三浦秀真、植田萌衣
大野さち子、中田竜太、須永貴之、勝又祐貴

目的 個別支援計画は、支援の方針を示し具体的な取り組みを進めるために重要なものであり、障害福祉サービスにおいて作成が求められる。児童領域においては、特に児童発達支援ガイドライン等において作成の指針が示されるなど、その重要性が増している。しかし、個別支援計画の作成手順や運用方法、理論的な枠組み等は十分に示されているとは言えず、支援者の経験に頼るところが大きい。そこで本取組では、「プログラム評価理論」を応用し、個別支援計画の作成、実施、評価の手続きを明確化したプログラムを試行したところ、一定の成果が見られたため報告をしたい。

方法 男児が入所するくぬぎ寮では、7名の支援者により、入所児童の個別支援計画の作成、実施、評価の際に、プログラム評価理論の「ニーズ評価」「セオリー評価」「プロセス評価」「アウトカム・インパクト評価」を応用し、「ニーズ評価」「セオリー評価」の前2段階に取り組んだ。3名の児童の個別支援計画の作成にあたり、「ニーズ評価」では、各児童にニーズについて、支援者がワークショップを行い、児童のニーズについて検討した。さらに、不足したニーズがないか、他の職員にも書面にて確認した。その後、ニーズの優先順位をつけ、他の職員に対してニーズが妥当であるかアンケートを実施した。「セオリー評価」では、ニーズを達成するために「ロジックモデル」を作成した。それを「支援モデル」と呼称し、支援者間でそのモデルの有効性について協議した。

結果 「ニーズ評価」では、優先される支援ニーズとして、「感情のコントロール」、「行動問題の軽減」、「発達の促進」がそれぞれ挙げられた。児童によって、ニーズが焦点化されたものもあれば、優先順位がつけづらい広範なニーズもあった。他職員へのアンケートからは、概ねニーズは妥当であるとの評価が得られた（表1）。

「セオリー評価」では、支援者間で一致した「支援モデル」を導出するまでに、各児童1時間程度のセッションが必要であった。支援者間で、効果的な支援のための考え方が異なり、協議を重ねる必要があった。

考察 本報告では、個別支援計画の作成段階までであるが、その手続きを明確に示すプログラムを実行できたと考える。一方で、プログラムを実施する中で課題も明らかになった。例として、児童の特性によるニーズの焦点化の違いや、職員間の支援に対する考え方の一致の方法などが挙げられる。今後、それらの課題を解決していき、社会に普及できるようなプログラムに改善していきたい。

参考文献

こども家庭庁 児童発達支援・放課後等デイサービス・居宅訪問型児童発達支援における支援プログラムの作成・公表の手引き 2024.

ピーター・H・ロッシら（大島巖ら訳）プログラム評価の理論と方法 日本評論社 2005.

表1 「ニーズ評価」のアンケート

質問項目	平均値 (N=4) (「全く思わない」1～「とても思う」:5)		
	A 児のニーズ	B 児のニーズ	C 児のニーズ
必要なニーズについて網羅されているか(別紙にニーズ一覧あり)。	4.67	4.33	4.67
上記の支援ニーズは、支援として取り組む上で、優先順位として高いと思うか	5.00	4.50	4.71
上記の支援ニーズ以外で、より優先されるべき支援ニーズがあると思うか	2.75	2.75	3.14
支援ニーズは、児童の発達上の課題に焦点を当てられているか	4.00	4.50	4.57